チャプレンだより 28

2026 年 9 月号

チャプレン　主教アンデレ大畑喜道

今月の聖句

神は愛です

ヨハネ第 1 の手紙　4 章 16 節

とても難しい事を学びます。神は愛です。それでは愛とは何でしょうか。16 世紀にキリスト教が日本に入ってきたとき、宣教師たちは日本語に聖書や教えを翻訳しています。当時日本に愛という言葉がなかったわけではありません。しかしこれらの言葉は、人に対して使う場合、親が子に、あるいは男が女に対する行為について使われて、相手を対等な人間として認めて尊重するということではなく、「かわいがり、離すまいとする」「かわいがる」「もてあそぶ」という、自己本位のものであったと言われています。愛執・愛着・愛欲・愛撫・愛好などのことばがありますが、目上から目下に、あるいは強者から弱者への、自己本位な行為・感情にほぼ限られて使われていました。そのような愛の行為は罪だと教えていました。そうしたら愛という言葉を使えない。そこで宣教師たちは大切という言葉に置き換えました。神は私たちのことを大切にしてくださった。どれだけ大切か。神の独り子を与えるほどに大切にされた。神の本質は何か、それは大切にするという事だ。愛という言葉よりも少し具体的で分かりやすいかも知れません。イエスの弟子の一人ヨハネは生涯、大切なことは愛だと語りつづけたと言われています。その弟子が書いた手紙があります。神が愛であるから、愛する者はみな、神を知ることになると教えます。わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからですとも語ります。愛する者というのは、神の愛によって、愛されたものたちのことです。言葉を簡単にすると、愛する者とは、神様に大切にされた者たちであるということ。神という親から、愛されたという経験を持つ者は、愛すること、愛されることが、なにであるかを知ります。そして、愛の原型を知り、自分たちも、その愛の形にならって、隣人や兄弟姉妹を愛することをはじめるのです。その愛の原型、愛の始まりが、神そのものです。わたしたちは、イエスに出会い「愛される者」であることを知り、聖霊によって「愛する者」へと変えられて行きます。神は、愛する方であり、愛される方でもあられます。わたしたちとの違いは、神は愛そのものであるということです。愛であられる方から愛が広がっていきます。ですから、

神は愛であり、愛の源流です。私たちはこの愛に愛されるまでは、神に対して無関心で、敵だと思っていました、神は、自分を怒りで滅ぼしてしまう脅威であり、恐れの対象でしかなかったからです。自分が神様から離れようとし、無関心を装うことで罪を犯した。自分の罪のために、自分は神によって裁かれて、滅ぼされるんだと、私を恐れさせ、「あなたを裁く」言っているような神は、わたしの敵であると。神をどのような存在だと私たちは思っているのか。神は独り子イエスをこの世に送り、その人間が受けるべき死の裁きを、愛する独り子にすべて負わせ、わたしたちの罪を、愛する独り子の犠牲によって、赦してくださったのです。 ここに愛があります。勝手に敵対していた私たちを、神は愛する子を手放しても、愛したいとお考えになり実行してくださいました。

「ここに愛がある」とヨハネは宣言します。その愛を知ったもの、愛を受けたものがするべきことは「互いに愛し合う」ということです。神の愛に応えることは、神に恩返しするために、なにかしなければと思うかも知れません。神のために愛された分だけ、私も神に同じように愛し返したい。神の愛を恩のように考えてはいけません。神の愛、先人たちが大切にと訳した、ギリシャ語ではアガペーと呼ばれますが、その愛は無償の愛です。神はわたしたちに恩を返せと、せがむような方ではありません。わたしたちを愛する時に、御子をこの世に送った時に、そのような恩を着せようなどとは考えてはいません。もし夫婦が、恋人同士が、相手の愛に同じように応えようとしたら、お中元をもらい、その御中元の中のゼリーを食べることなく、お返しのことばかりを考えて頭がいっぱいになっていたら面倒くさくなります。贈り物を味あわず、返さねばという義務感だけに縛られるところには、喜びがありません。味わうことがなければ、贈り物をした人に感謝する気持ちも起こりません。神が聖書を通して「この愛にただ与りなさい」といいます。「この愛をちゃんと味わいなさい」ということです。神に大切にされていることを味わい、感謝することでできるようになったら喜びの内に「愛に応えたい」という気持ちに変えられていきます。ヨハネは「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して」くださったと語っています。神を愛せるのは、神が愛してくださったから。神はわたしに愛を返しなさいとは言いません。「その愛を隣の人に与えなさい」と言います。日々出会う人々を私たちはどれだけ大切にできるか。無条件で、国籍も民族も、肌の色も髪の色も違っても、みんな神が愛している大切な存在。子どもたちもそんな思いで人と出会っていって貰いたいと願っています。